南無南無坊主達の潜む屋敷の奥へと進むと一人の女が現れた。
「ハ～イ、お久しぶりね。アフロサムライ。って、言っても知ってるのはあなたが殺したバカな姉のほうだったかしら」
肌はほとんどを露出しており、豊満な肉体が色香を放つ。
美しい髪、冷徹な眼差し、そして見覚えのあるかんざし。
女は軽い口調で以前に彼に殺された女忍者の妹であることを告げた。

「どう？殺される前に私と遊ばない？あなた、お菊って女を抱いたようだけど、あんな田舎くさい女なんかじゃ物足りなかったでしょう？しかも、裏切って南無南無坊主に殺されたってバカみたいな最期で笑えるわ。

自慢じゃないけど、私のコレに挟まれた男はみんな一瞬でイッちゃうの」

女はケラケラと笑いながら、これ見よがしに己の胸を寄せる。

「痛みも感じずに殺してあげるんだから、私って優しいでしょう。うふふふふ。

さあ、いっぱい、楽しみましょう」

冷徹なまなざしで、幾多もの男を虜にし、幾多もの男のモノを咥えてきたであろう唇が艶かしく彼を誘う。

四半刻後、部屋には女の喘ぎ声が響き渡っていた。
彼を陥れるはずが女忍者は逆に幾度もその豊満な肉体を犯され、身体の自由を奪われていた。
彼のモノが激しく突き入れらる度に大きな乳房が激しく揺れ、先ほどまでの口調とは一変した恐怖の混じった声を上げる。
「や・・・い・・・ぁ。は・・・激しすぎ・・・るぅ・・・あっ。あんっ！」

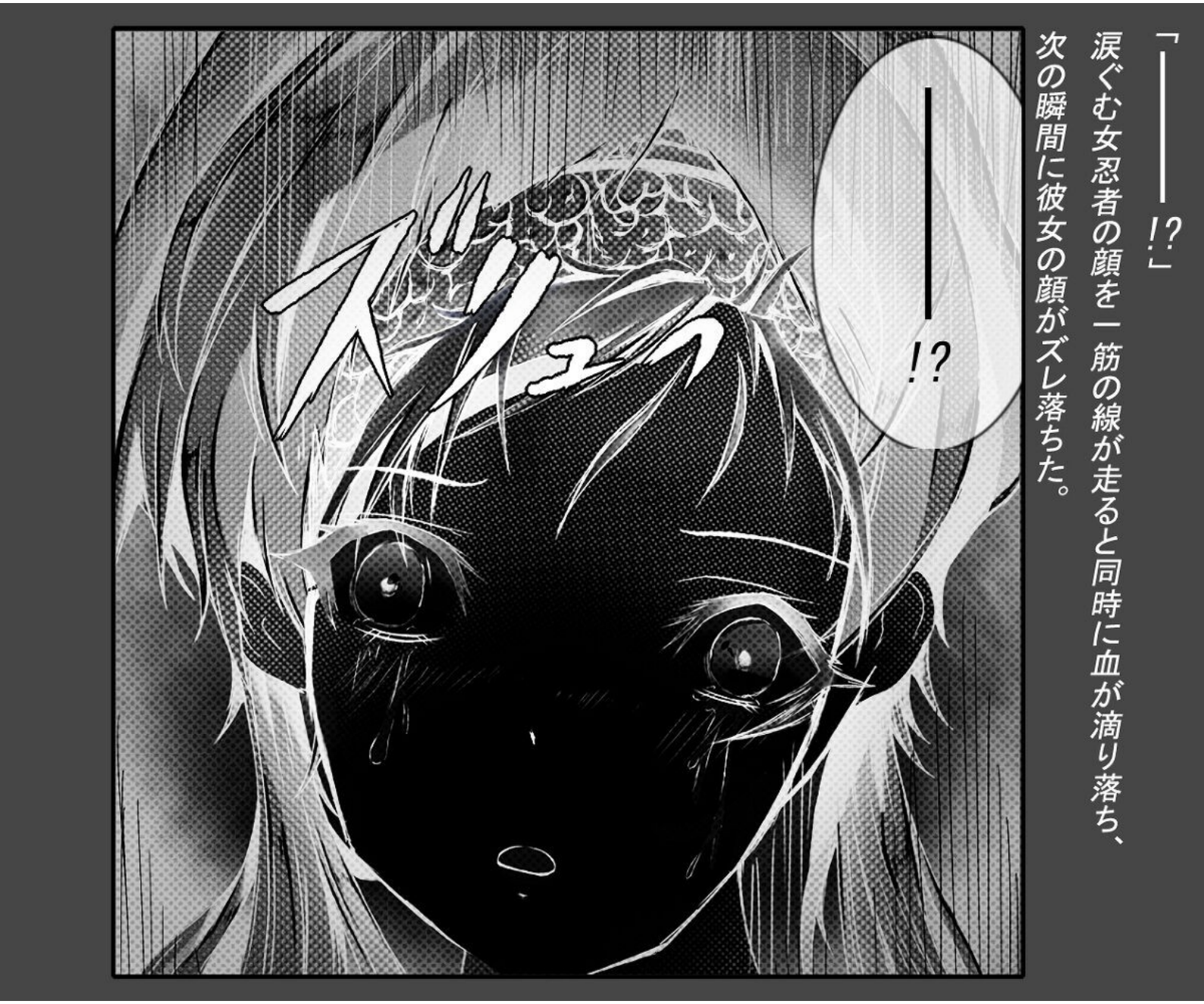
アフロの手は止まらなかった。
自身を救ってもらい、また敵同士でありながらも愛という感情をくれたお菊。
そんな彼女の死を嘲笑ったこの女忍者に彼は心の底より怒りが溢れ出していた。
「どうした？まだ半分も終わっていないというのに、もう限界か？・・・悪いがそろそろ最後を出させてもらうぞ」

「――――！？う、うそっ。もうやめ・・・」
女忍者の言葉も空しく、勢いよく大量の精液が彼女の中へと注がれる。

「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁっあっ！」
悲鳴が響き渡る。
「ゆ、ゆるざ・・・ない・・・絶対・・・ゆるさ・・・ない！こんなこと・・・こん・・」
「黙れ、外道」
涙ぐみ、しかし憎悪に駆られた女忍者に、アフロサムライは冷徹に言い放った。

その瞬間、彼女の大きな胸を一筋の線が横に走ると、そこから彼女の身体に切れ目が広がっていく。
「な、なに？なんで…私の身体…いや…いや…」
徐々にずれていく己の身体に、くノ一は驚愕の表情で己に起きている異常に困惑する。
「貴様ごときお菊を笑う資格などない。これまで以上の恐怖を味わいながら逝けっ」

「いやっ。いやっ。死にたくない…死にたくなひっ…たすけて…たすけ」
「手遅れだ。死ね」



「――――!?」

涙ぐむ女忍者の顔を一筋の線が走ると同時に血が滴り落ち、

次の瞬間に彼女の顔がズレ落ちた。

「ふむ、やはりこやつでは役不足であったか」
アフロサムライが去ってすぐ、部屋に南無南無坊主が現れた。
そこには変わり果てた女忍者の亡骸。

胸部分で切断された亡骸には
刀が深く突き刺され、女の秘部を
突き抜けた部分から大量の精液と
彼女の血が勢いよく溢れ出ている。
切断されたにも関わらず中身を晒した
二つの乳房は激しく揺れ、亡骸は未だ
生にしがみついているかの様に
ビクンビクンと揺れ動く。
そしてすぐ側には胸から上を、顔を切断
され、中身を晒した女のもう一つの亡骸
が転がっている。
同様に未だ身体全体が激しく痙攣し、
切断された胸が揺れ動く。
「あのジャスティスを倒した凄まじい剣技。この切断面から見てこやつは斬られたことに気づかぬうちに死んだであろうな。意識は既にないものの、身体がまだ生に執着しておるわい。
…それにしても」

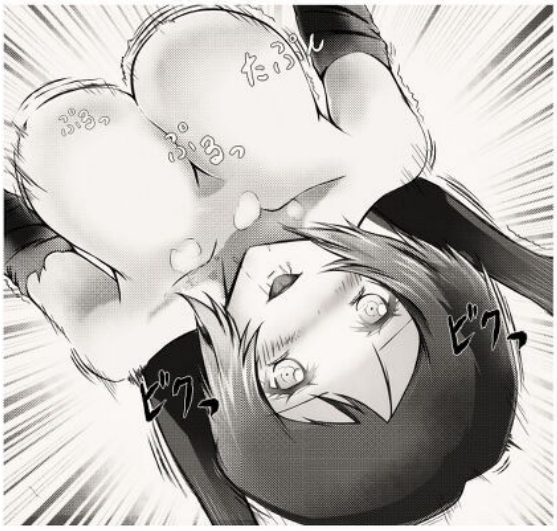
「生意気な女だったが、噂以上の感触じゃ。射れただけで溢れ出しおったわ。
前々から一度犯してみたかったが、こやつめはわしらに対して反抗的であったからのぉ」
削げ落とされた顔は南無南無坊主に拾い上げられ、その艶かしかった口に大きなイチモツがねじ込まれていた。
その表情は苦痛に歪み、目は大きく見開かれ、それが己の死に顔となろうとは彼女自身、知る術もなかったであろう。

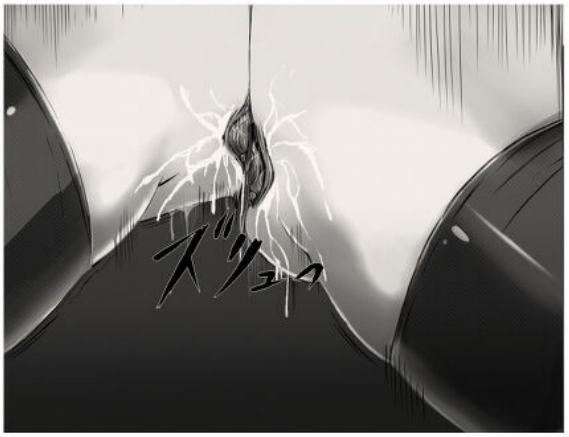
「だが、もう拒むことも出来ぬ。惜しむべきは生きた状態で楽しみたかったが、まあよい。
身体のほうもあとで存分に楽しむとして、
貴様は今後はワシらの性処理玩具として扱わせてもらうぞい。ヒャッヒャッヒャッヒャッ」
バラバラになったくノ一の亡骸、
そして血に染まった部屋に、狂気に満ちた南無南無坊主の笑い声が響き渡る。

あっ
いや
あっ
ズっ

ビクっ
ビクっ

ズぶっ





Thank you!